

# 王朝びとの浦島説話——もうひとりの浦島太郎

## 『続浦嶋子伝記』略注

渡 邊 秀 夫

### はじめに

十世紀前半に成立した『続浦嶋子伝記』については、かなり以前にその作品世界の特異な成立過程と作品構造に関する拙文を記したが、<sup>(1)</sup>ここでは、全体に互る本文の読解は紙幅の関係もあって、保留したままであった。その後、この作品については、最近簡略な注釈も公刊されたが、<sup>(2)</sup>出典論的な検討は依然として不十分なままの状態にある。たまたま昨年度の大学院の演習でこの作品をとりあげ、学生諸君と共に読みなおす機会を得て、あらためて出典的な検証を加えることができたので、そのささやかな報告をかねて、なかば放置したままであった過去の拙文の、遅きに失した補訂にかえたい。<sup>(3)</sup>

本稿では、紙幅の制約もあるので、浦嶋子の伝の部分に關し、略注を掲げ、その出典の傾向を一覧することを目的とする。なお、本文は「群書類従」本に拠り、できるだけこの本文によって解説することを心がけ、場合によって、適宜、私なりの解釈にもとづき改訂私案を呈示することとする。

### 〔注〕

- (1) 「続浦嶋子伝記論」(中古文学・第二号・昭和五一年九月)、「初期物語成立史の断想——『続浦嶋子伝記』の意味するもの——」(国文学研究・第六七集・昭和五四年三月)。なお、初期物語成立史上上の本書の意義については、近刊予定の拙著『平安朝文学と

漢文世界』第三篇第三章参照。

- (2) 重松明『浦嶋子伝』(昭和五六年一月・現代思潮社)。本書は『続伝』の全文に互る注釈として評価されるべきものであるが、平安朝文人の文章観・表現方法に対する配慮に乏しく、かつは近來の先行論著の成果を殆ど参照していないことなどによる誤読の少なくないことが惜しまれる。

- (3) 本『続伝』の注釈に対する基本的態度は、小島憲之『上代日本文学と中国文学』(中巻・第五篇第八章)で試みられた出典論を徹底させることに尽きる。特に、『文選』の利用がベースになっていることは、王朝漢文の文章作法に鑑みて、当然予測されることではあるが、あらためてその重みを再認識することとなった。また、『抱朴子』をはじめとする道教関連の書に關しては、特に、道教用語の理解に相当の困難を伴った。その一部分にはなお、未解決の語彙が残る。本書の注釈が遅々として進まないでいる理由の一斑は主として、この方面の知識の欠如・不勉強にも拠る。なお、本書の訓読に關しては、浦部重雄『続浦嶋子伝記訓読』(国文学研究・第六号・昭和五三年二月)が、古辞書を利用して歴史訓の復元を試みた労作がある。ただし、文章の読み(解釈)については、なお、補訂すべき点が少ない。

### ◆「王朝びとの描く浦島」『続浦嶋子伝記』に見るもうひと

りの浦島太郎——内容の素描

ここに描かれた浦島は、著しく神仙的に造形しなおされて

いる。そもそも彼の紹介は次のように始まる。

朝霞・清露など朝昼晩の天地宇宙の氣(六氣)を吸い、雲に乗って天を翔け、さまざまな道術を駆使し、危害・災厄を払い、地に潜っては身を隠し、水上をも自由に歩行する。天を屋根とし大地を我が席とし、天地四方の果てにまで飛遊し、遙か地の果てのことまでお見通し。天下の人民を父母となし、世界の万民はみな兄弟。かつて、漢の武帝の勅命を承け黄河の源を探索し浮き木(杙)に乗って天の川に至ったという張鸞と同道し共に銀河に遊んだといひ、また、かの漁父の後を追って汨水のほとりに行き、そこで屈原に出会ったという。ここで、張鸞や屈原などといった人物が登場するのは、漁師としての浦島が水界に關係の深い因縁で、「天の川」「汨水」という河にちなんだ著名な故事(河といえは即座に想起する王朝びとの觀念連合)を踏まえようとする訳である(17-13)◇。その浦島が舟上で漁をするうちに釣り上げたものは万年を経た霊亀(能く人語を理解するという)であり、にわかには精神恍惚として夢見るような気分の中に、ふと気づくと、亀から変化した乙女は絶世の美女であった。ここでまた、この美人の形容には、『遊仙窟』や『文選』の情賦に収められた「高唐の賦」「洛神の賦」「神女の賦」に見られる仙女を叙する美辞がふんだんに投入される。……その容貌の麗しきといったら、かの南威(古代の美女)も袂で顔を覆って死にたいと思うほど、またその白い肌のたおやかなさまはあの西施(古代の美人)でさえ恥ずかしさに顔を隠して到底適わなほどだ。細く長い眉は三日月が蛾眉山に出たかのように繊細秀麗であり、魅惑的な脛は流れ星が天の川をよぎってキラ

リと光り輝いたかのようだ。雲なすゆたかな黒髪は艶しい脂を塗らずとも、美しい顔はわざわざ白粉をつけずとも、そのまま十二分に美しい。その艶冶な姿態は、不意に飛び立とうとする白鳥や泳ぎ遊ぶ龍が海のなかで湯浴みするかのよう。……はたまた、楚の襄王が夢中に交歓したという巫山の神女が、朝には雲となり夕べには雨となって現れたかのようだ……云々と(14-26)。◇そこで、浦島はこの絶世の美女に向かつて、こう言う。「神女よ、いったいどんな因縁で仮に亀に変わって私のもとにやってきたのかね。お住まいはどこら。親はどなたですか」と。住所や父母係累(親権者)を問うのは、この時代、求婚の申し出をなすことと同義。求愛した浦島に對する神女の承諾のことばは、次のようなものである。「妾は理想の神仙境蓬萊山に住む娘です。父母兄弟の共に住む金銀宝石で飾られた不老不死の宮殿が私の住処です。かつてあなたと私は夫婦でした。その後二人は別々に生まれ代わり、私は天仙となって蓬萊山の宮殿に暮らすこととなり、一方あなたは地仙となって澄の江の浦に日々を送る身となったのです。その昔の因縁に感じて、今、再び夫婦の契りを結ぼうと思つてやって来たのです。さあ、一緒に蓬萊宮へ行って昔日(前世)の思いを遂げましょう」と(27-30)。◇こうして、神女の命じるままに目を閉じると、夢見るがごとく、稻妻がきらめくごとく、たちまち玄妙な変化が起こり、うっとりとするうちに、異空間へ誘い出された小舟は万里の波濤にさまよいつつ蓬萊山へと漂着する。東海の彼方に浮かぶという蓬萊山への道行や、到着した蓬萊宮殿の豪華華麗なさまを写す行文は、これまた、『文選』△江海V部の「海の賦」・「江の

賦」や、A京都V部・A宮殿V部、あるいは上記A情V部の「高唐の賦」などの異郷描写の該当部分を引用羅列する。さらにはまた、この蓬萊宮中に咲き誇る美しい花の乱れ散るさまを述べる箇条には、陶淵明の「桃花源記」が記す、仙桃の花々が咲き乱れる桃源境の風景をも重ねているようである——ここで桃源境の趣向を引くのも、やはり共に異界に分け入った漁師という縁によるのであろう——(31)◇さて、天仙の住む蓬萊宮に招き入れられ、益々仙人の風性を革新した浦島は、いよいよ仙女と同衾しようとするのだが、その箇所は、『医心方』(房内)に引用されるとき道教医学の房中術、性技の型の数例を引用し、男子王朝官人達の好むボルノグラフィーの趣向を盛り込む。こうして房事を終えた二人は、神女の父母兄弟の前に招じ入れられ祝宴を受けることとなる。これはちょうど、当時の婚儀のめでたい完了を祝う△三日夜の餅▽△露見▽の儀式に見合うものといつてよい。宮中での盛大な宴会はいつまでも続き、その間、浦島はみずから霓裳羽衣(仙人の天を飛行する衣)を着て神仙境にのびのびと自適し、霧を吸い霞を食らい虹の懸かる青空にゆったりと舞えば、巖の四周の花は一年中枯れることなく咲き乱れ、不老長寿をもたらす巨大な仙人鏡は眼下に常に望まれる。『六甲霊飛』『万畢鴻宝』といった、仙道を極めるための奥義を述べた仙書を読み、朝な夕なに不死の仙薬(金丹・石芝・芝草など)を飲めば、折からその長生を祝して、古代の著名な仙人がたちかわり飛来するのであった。誠に、仙人になることを渴望する者は牛の毛のごとく際限なく多いが、われらのように神仙となることは、あたかも麒麟の角を探し求めるようにめったに

成就するといふものではないのだ(76)◇さて、浦島説話の話型に従って、飲楽の限りを蕩尽し飽きた浦島は故郷恋慕の思いに駆られるのだが、本「統伝」は、そのきっかけを唐突に、「楽しみを極むべからず」(「礼記」)という儒教的倫理や「榮枯盛衰・愛別離苦の道理」という仏教的觀念の表明によって述べる。故郷恋慕・生母への恩愛の情に囚われ日々瘦せこける浦島——世俗の人情に溺れるという点ではそれらを超越してあるべき仙人としての失格の表示でもある——は、神女の命によって、再び故里へ帰ることとなる。その際、浦島に贈られたものは、例の「玉てばこ」だけではない。神女は、かの老子が孔子との借別の折に述べたということば——つまらぬ人間は送別に際して財物を贈るが、君子は言葉で贈るといふ——に倣って、大切な戒めの言葉を贈る。八美しい音楽・美麗な色彩・うまき酒・艶麗な容貌や白い肌、これら耳・目・胃袋・女色の欲望・楽しみは体を損ない命を縮めるもの、よくよく慎んで一層の養生に励むように▽と。これは、仙人になるための具体的方法を説く『抱朴子』から引用するもので、その意味は、これら世俗の快楽は、仙人としての素質・骨相を損なうものゆえ、仙人たる浦島は再度この蓬萊宮へ戻らうとするならば、これらを厳しく斥け、斎戒していなければならないと、諭したものである。さらに加えて、ここで錦の織物が浦島に贈与されるのというのも、『漢書』(朱亮臣伝)の著名な故事を引いて、「錦を着て故郷に帰る」という洒落に仕立てたもの(101)◇統いて連綿と描かれる二人の別れの心情は、上掲の『遊仙窟』や『文選』(洛神賦・神女賦)の仙女との別離の場面、あるいは同じく『文選』の「別

れの賦」を下敷きにする。なおまた、この「八手を取ってたちもとおり、胸をなでて足踏みする」という箇条には、匈奴の地に於ける李陵と蘇武との今生の別れの場面をも重ねるかのようである。故郷に帰還した浦島は、蓬莱の宮中で遊んでいた僅かの間に、既に数百年の時代を経過していたことを知って悲嘆に暮れ、仙女を慕う心に耐え難く、「玉てばこ」を開けたところ、紫雲（源初的には、浦島の魂——本来「玉てばこ」は魂を保持しておく特殊容器。ひとの靈魂は死しては常世「漢語に翻訳すれば「蓬莱山」に帰るから、既に数百年を経過して老衰死してしまふ人体、魂が遊離している筈の身体「故郷に帰った浦島」に現世で魂を附着させておく生命維持装置のごときもの——）が蓬莱山の彼方へ飛び去り、浦島はたちまち老人となった（山々118）。◇『万葉』以来の古伝承では死ぬこととなる浦島は、神女との約束を破り、再会を断られたことを悟り激しく悲傷するが、金粟を鳴らして玉液を飲む（鼻粟をたたいて唾液を飲み込む？）という道教の呪術、精神を統一し神仙を保持するための、身体のある部位に関わるマジカルな秘術を試み、なお、遙かに蓬莱山を望んでは仙宮での楽しき男女の語らいを思いやりつつ、巖河に飛遊し海浦に隠れ住んだが、遂に杳としてその後の消息を聞くことはなかった。後の世の人は、浦島のことを地仙と呼びならしたという（124〜127）。

以上のように、ここには、通行の浦島とは著しく懸隔した、平安王朝の文人たちが造形した新たな浦嶋子——王朝びとの描いたもうひとつの理想の浦島像の存在に注目されるであろう。この時期の人々が旧来の古伝承をその時代の要求に適うべく読み替え再生させるために必要とした観念と

はなにか、またそうした新規の虚構を実現するためのイメージと文飾はどのようなようにして培われ、綴りあげられたか、その文章技法上の諸問題をも具体的に探査究明しよう点で、本『統伝』は極めて興味深い作品である。そのような諸点を確認するために、以下にその簡略な注を掲げよう。

1 【不知何許人】 「仇生者、不知何所人也」（『列仙伝』仇生）、「服闋者、不知何所人也」（同・服闋）、「負局先生者、不知何許人也」（同・負局先生）。☆神仙を紹介するときの類型。

2 【服氣】 【乘雲】 「抱朴子曰。欲求神仙、唯當得其至要。至要者、在於至精行氣、服三大藥、便足。亦不用多也。……故曰仙人服六氣。此之謂也」（『抱朴子』内篇・釈帶）。「藐姑射之山。有<sub>二</sub>神人<sub>一</sub>居焉。肌膚若<sub>二</sub>冰雪<sub>一</sub>。綽約若<sub>二</sub>處子<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>食<sub>二</sub>五穀<sub>一</sub>、吸<sub>レ</sub>風飲<sub>レ</sub>露。乘<sub>二</sub>雲氣<sub>一</sub>、御<sub>二</sub>飛龍<sub>一</sub>、而遊<sub>二</sub>乎四海之外<sub>一</sub>」（『莊子』・逍遙遊）。☆元氣の精を飲み雲に乗ってあまがける。仙人の所作。なお、「六氣」とは、「養六氣而飲<sub>二</sub>沉澗<sub>一</sub>兮、漱正陽而含<sub>二</sub>朝霞<sub>一</sub>」（『楚辭』遠遊）の注によれば、「朝霞<sub>二</sub>赤雲<sub>一</sub>」（日の出の時の赤黄の氣）、「飛泉」・「淪陰」（日没以後の赤黄の氣）、「沉澗<sub>二</sub>清露<sub>一</sub>」（北方の夜半の氣）、「正陽」（南方の日中の氣）など、天地宇宙の氣をいう（王逸注『楚辭章句』及び宋洪興祖『楚辭補注』引『陵陽子明經』・「莊子李注」・『文選』大人賦五臣注など参照）。

3 【天蔵……地戸】 「遁甲中經曰、欲<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>道<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>天內日天內時<sub>一</sub>、劫<sub>二</sub>鬼魅<sub>一</sub>、施<sub>二</sub>符書<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>天禽日天禽時<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>名山<sub>一</sub>。欲<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>百邪虎

- 狼毒虫盜賊不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>近<sub>レ</sub>人者、出<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>藏<sub>二</sub>入<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>戸<sub>一</sub>。凡<sub>レ</sub>六癸為<sub>二</sub>天<sub>レ</sub>藏<sub>一</sub>、六己為<sub>二</sub>地<sub>レ</sub>戸<sub>一</sub>也。〔抱朴子〕内篇・登涉。なお「若或見蛇、因向<sub>レ</sub>日左取<sub>二</sub>三氣<sub>一</sub>閉之、以<sub>レ</sub>舌柱<sub>二</sub>天<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>手捻<sub>二</sub>都<sub>レ</sub>関<sub>一</sub>、又閉<sub>二</sub>天<sub>レ</sub>門<sub>一</sub>塞<sub>二</sub>地<sub>レ</sub>戸<sub>一</sub>、因以<sub>レ</sub>物抑<sub>二</sub>蛇<sub>レ</sub>頭<sub>一</sub>而手築<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、画<sub>レ</sub>地作<sub>レ</sub>獄以盛<sub>レ</sub>之、亦可<sub>レ</sub>捉弄<sub>二</sub>也<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>繞<sub>二</sub>頭<sub>レ</sub>頸<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>嚙<sub>二</sub>人<sub>レ</sub>也<sub>一</sub>〔同〕も参考すべし。か。「天門地戸者<sub>二</sub>阿<sub>レ</sub>耳<sub>一</sub>也」〔修身十種〕卷二一。宮沢正順「道教典籍にみえる周身部分の名称について」〔東方宗教第六七号〕参照。☆身に迫る危害・禍いを避けるための仙人の道術の一つ。
- 4 〔陸沈〕「又曰、避<sub>二</sub>亂<sub>レ</sub>世<sub>一</sub>絶<sub>二</sub>跡<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>名山<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>憂<sub>レ</sub>患<sub>一</sub>者、以<sub>レ</sub>上元<sub>二</sub>丁卯<sub>一</sub>日、名曰<sub>二</sub>陰<sub>レ</sub>德<sub>一</sub>之時、一名<sub>二</sub>天<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>隱<sub>レ</sub>淪<sub>一</sub>。所謂<sub>二</sub>白<sub>レ</sub>日<sub>一</sub>陸<sub>レ</sub>沈<sub>一</sub>、日月無<sub>レ</sub>光、人鬼不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>也」〔抱朴子〕内篇・登涉。☆乱世を避けるために、地に潜って身を隠す術。隠遁をも言う。天宮の門を開いて天帝の宮殿に遊ぶことは、「命<sub>二</sub>天<sub>レ</sub>関<sub>一</sub>其<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>関<sub>レ</sub>兮。排<sub>二</sub>閻<sub>レ</sub>闔<sub>一</sub>而望<sub>二</sub>予<sub>一</sub>」〔楚辭〕遠遊にもみえる。
- 5 〔水行〕「或問曰、昔聞、談<sub>レ</sub>昌<sub>一</sub>或步<sub>二</sub>行<sub>レ</sub>水<sub>上</sub>、或久居<sub>二</sub>水<sub>レ</sub>中<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>乎。抱朴子曰、以<sub>レ</sub>葱<sub>レ</sub>涕<sub>二</sub>和<sub>レ</sub>桂<sub>一</sub>、服<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>梧<sub>レ</sub>桐<sub>一</sub>子<sub>レ</sub>大<sub>一</sub>、七<sub>レ</sub>九<sub>レ</sub>日<sub>三</sub>服<sub>二</sub>至<sub>三</sub>三<sub>レ</sub>年<sub>一</sub>、則能<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>水<sub>上</sub>也」〔抱朴子〕内篇・登涉。「或食<sub>二</sub>六<sub>レ</sub>戊<sub>レ</sub>符<sub>一</sub>千<sub>レ</sub>日、或以<sub>レ</sub>赤<sub>レ</sub>斑<sub>レ</sub>蜘蛛<sub>一</sub>及<sub>二</sub>七<sub>レ</sub>重<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>馬<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>合<sub>二</sub>馮<sub>レ</sub>夷<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>仙<sub>レ</sub>丸<sub>一</sub>服<sub>レ</sub>之、則亦可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>水<sub>レ</sub>中<sub>一</sub>、只<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>塗<sub>二</sub>臙<sub>レ</sub>下<sub>一</sub>、則可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>步<sub>二</sub>行<sub>レ</sub>水<sub>上</sub>也」〔同〕、「步<sub>二</sub>行<sub>レ</sub>水<sub>上</sub>」〔白氏六帖事類集〕「法術」。
- ☆水上を歩行する道術。
- 6 〔以<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>幕<sub>一</sub>〕〔以<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>席<sub>一</sub>〕「有<sub>二</sub>大<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>生<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>天<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>一<sub>レ</sub>朝<sub>一</sub>、万<sub>レ</sub>期<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>須<sub>レ</sub>臙<sub>一</sub>。日<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>扇<sub>レ</sub>扇<sub>一</sub>、八<sub>レ</sub>荒<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>庭<sub>レ</sub>衢<sub>一</sub>。行<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>撤<sub>レ</sub>迹<sub>一</sub>、居<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>室<sub>レ</sub>廬<sub>一</sub>。幕<sub>二</sub>天<sub>レ</sub>席<sub>レ</sub>地<sub>一</sub>、縦<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>」〔文選〕卷四七・劉伶・酒德頌、「幕<sub>二</sub>天<sub>レ</sub>而席<sub>レ</sub>地<sub>一</sub>。誰<sub>レ</sub>奈<sub>二</sub>劉<sub>レ</sub>伶<sub>レ</sub>何<sub>一</sub>」〔白氏文集〕卷六二・詠<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>五<sub>レ</sub>首<sub>一</sub>・小<sub>レ</sub>庭<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>月<sub>一</sub>。☆「天をとばりとなし、大地を

- わが庭（席）となす。仙人（真人）の壮大なありようを言う。
- 7 〔六合〕「六合之外、聖人存而不<sub>レ</sub>論。六合之内、聖人論而不<sub>レ</sub>識」〔莊子〕・齊物論。「普<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>下<sub>一</sub>、莫<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>王<sub>レ</sub>土<sub>一</sub>。率<sub>二</sub>土<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>濱<sub>一</sub>、莫<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>王<sub>レ</sub>臣<sub>一</sub>。是以<sub>二</sub>六<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>内<sub>一</sub>、八<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>、浸<sub>レ</sub>淫<sub>二</sub>衍<sub>レ</sub>益<sub>一</sub>」〔漢書〕卷五七下・司馬相如伝。☆「天地四方」の意。
- 8 〔八挺〕「上<sub>レ</sub>暢<sub>二</sub>九<sub>レ</sub>垓<sub>一</sub>、下<sub>レ</sub>泝<sub>二</sub>八<sub>レ</sub>挺<sub>一</sub>」〔挺〕。若<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>挺<sub>一</sub>。地<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>八<sub>レ</sub>際<sub>一</sub>也。〔文選〕卷四八・司馬相如・封禪文・「李善注」。『漢書』卷五七下・司馬相如伝にも。☆「地の果て」の意。
- 9 〔蒼生〕「蒼生<sub>レ</sub>顛<sub>レ</sub>然<sub>一</sub>、莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>欣<sub>レ</sub>戴<sub>一</sub>」〔尹文子〕曰。堯<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>化<sub>二</sub>布<sub>レ</sub>于<sub>二</sub>四<sub>レ</sub>海<sub>一</sub>。仁<sub>レ</sub>惠<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>蒼<sub>レ</sub>生<sub>一</sub>」〔文選〕卷三七・劉越石・勸進表・「李善注」。☆「人民（おおひとくさ）」の意。
- 10 〔四海之赤子為<sub>二</sub>兄弟<sub>一</sub>〕「四海之内、皆<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>兄<sub>レ</sub>弟<sub>一</sub>也」〔論語〕顔淵篇。〔赤子〕「每<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>芻<sub>レ</sub>藁<sub>一</sub>、歲<sub>レ</sub>課<sub>二</sub>田<sub>レ</sub>租<sub>一</sub>、愀<sub>レ</sub>然<sub>一</sub>疼<sub>レ</sub>懷<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>憐<sub>二</sub>赤<sub>レ</sub>子<sub>一</sub>」〔尚書〕曰、若<sub>レ</sub>保<sub>二</sub>赤<sub>レ</sub>子<sub>一</sub>、惟<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>康<sub>一</sub>父<sub>一</sub>〔李善注〕。赤<sub>レ</sub>子<sub>一</sub>、嬰兒、言、憐<sub>二</sub>下<sub>レ</sub>民<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>此<sub>一</sub>〔五臣注〕〔文選〕卷三六・任昉・天監三年策秀才文三首。「遂<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>曰、海<sub>レ</sub>濱<sub>レ</sub>遐<sub>レ</sub>遠<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>習<sub>二</sub>聖<sub>レ</sub>化<sub>一</sub>、其<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>困<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>飢<sub>レ</sub>寒<sub>一</sub>而吏<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>恤<sub>一</sub>。故<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>陸<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>赤<sub>レ</sub>子<sub>一</sub>盜<sub>レ</sub>、弄<sub>二</sub>陸<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>兵<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>潢<sub>レ</sub>池<sub>一</sub>中<sub>一</sub>耳」〔漢書〕卷八九・循吏伝・龔遂。☆「民・百姓」の意。△世界の万民はみな兄弟。やはり仙人の壮大なありようを言う。（参考）「四海兄弟」〔世俗諺文〕「論語云一」。〔参考〕「赤子」〔世俗諺文〕「尚書云一」。
- 11 〔形似<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>笑〕「志<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>奪<sub>レ</sub>者也」〔形似<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>笑、志<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>奪〕〔三教指帰〕卷下、「三<sub>レ</sub>軍<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>奪<sub>レ</sub>帥<sub>レ</sub>也、匹<sub>レ</sub>夫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>奪<sub>レ</sub>志<sub>レ</sub>也」〔論語〕子罕篇。☆「容貌は劣るが、志しの堅固なことは誰にも負けない」。
- 12 〔伴<sub>二</sub>查<sub>レ</sub>郎<sub>一</sub>而陵<sub>二</sub>銀<sub>レ</sub>漢<sub>一</sub>、近<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>牽<sub>レ</sub>牛<sub>レ</sub>織<sub>レ</sub>女<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>星<sub>一</sub>〕「漢武帝、令<sub>レ</sub>

張翥使大夏尋河源、乘槎經月而至一処、見城郭如官府、室内有二女織、又見一丈夫牽牛飲河、翥問曰、此是何処、答曰、可問敵君平、織女取支機石、与翥。而還後至蜀、問君平、君平曰、某年某月、客星犯牛女、所得支機石為東方朔所識」(守屋美都雄訳注「荆楚歲時記」平凡社東洋文庫参照)。「靈仙駕鶴去。星客乘查逐」(「懷風藻」・藤原史・五言・七夕)。☆「黄河の源を訪ねていかだに乗って天の川に至ったという張翥とともに天の川に昇り、牽牛・織女の二星にまみえる」。(参考)「乗槎」(「世俗諺文」「博物志云」)。

13 「逐漁父而過汨羅、親逢吟沢懷砂之客」(「屈原至於江浜、被髮行吟沢畔、顔色憔悴、形容枯槁、漁父見而問之曰、子非三閭大夫歟、何故而至此、屈原曰、乃作懷沙之賦、於此是懷石遂自投沈汨羅以死」(「史記」卷八四・屈原伝、「楚辭」・漁父、「文選」卷三二・鹽下・漁父)。「屈原……被王逐逐、乃赴清冷之水。楚人思慕、謂之水仙。其神遊天河、精靈時降湘浦。楚人為之立祠、漢末猶在」(「拾遺記」卷一〇)。☆これによれば、屈原は死後、水仙となって、天の川に遊んだという。〈漁夫につき従って汨羅(河)を通り、そこで屈原と逢った〉。「改訂」「砂一沙」は通用。◇漁師である浦嶋の縁で、河水に関連のある「查郎」と「漁父」とが引き合いに出されている。

14 【心神恍惚不寐寐】「精神恍惚、若有所喜、……寐而夢之、寤不自識」(「文選」卷一九・宋玉・神女賦)。☆「精神が恍惚状態となって、夢かうつつか定かでない」。

15 【靈龜】「雒書曰靈龜者、玄文五色、神靈之精也」(「初学記」卷三〇・龜)。「龜千年生毛、龜寿五千年謂之神龜、万

年曰靈龜」(「述異記」)。「玉策記曰、千歲之龜五色具焉。其額上兩骨起似角。解人之言。浮於蓮葉之上、或在叢蓍之下」(「抱朴子」内篇・對俗)。☆万年を経た靈妙な龜。人語を解すという。◇龜が女人に変化すること。「幽怪録曰、劉交居若耶溪、忽聞有二人採蓮喧笑聲。交乃斷柳枝、蔽身視之。忽見十余女子從一華林而出、皆衣青綠、入叢蓮相對而歌。乃棹舟以遁之、諸女皆化為龜入水」(「淵鑑類函」卷四四〇・龜)。

16 【尤物】「夫有尤物、足以移人、苟非德義、則必有禍」(「春秋左氏伝」昭公二八年)。「尤物・傾國」(「白氏六帖事類集」美婦人)。「生亦惑。死亦惑。尤物惑人忘不得。人非木石皆有情。不如不遇傾城色」(「白氏文集」卷四・李夫人)。☆人を惑わし、國を滅ぼすほどの絶世の美女。

17 【玉顏・素質・眉・蛾】「貌豐盈以莊姝兮、苞溫潤之玉顏。眸子炯其精朗兮、瞭多美而可觀。眉聯娟以蛾揚兮、朱脣的其如丹。素質幹之醴美兮、志解泰而体閑」(「文選」卷一九・宋玉・神女賦)。☆美しい顔・白い肌・蛾の触覚のような美しい眉。

18 【南威】「戰國策曰、晋文公得南威、三日不朝、遂推南威而遠之曰、後代必有以色亡國者」(「初学記」卷一九・美婦人「南威・西施」)。☆「西施」とともに古の美女。

19 【西施掩面無色】「其象無双、其美無極。毛嬙障袂不足程式、西施掩面比之無色」(「文選」卷一九・宋玉・神女賦)。「能使西施掩面百遍燒粧、使南國傷心千廻撲鏡」(「遊仙窟」)。☆「遊仙窟」の「毛嬙・西施」を「南威・西施」としたのは、対に揃えたほかに、「南威・西施」の「尤物(人心を惑わし危難に陥れる美女・傾國)としての性格を毛嬙のそ

れに重ねようとするものであろう。文人達の儒教的な倫理観の  
 投影をも窺いうるか。

20 【眉如<sup>レ</sup>初月出<sup>ニ</sup>於蛾眉山、厯似<sup>レ</sup>流星流<sup>ニ</sup>於天漢水】 「厯疑<sup>ニ</sup>

織女留<sup>レ</sup>星去、眉似<sup>ニ</sup>姮娥送<sup>レ</sup>月来」(『遊仙窟』)。☆眉はまる  
 で三日月が蛾眉山にかかったかのよう、厯は流れ星が天の川に  
 ながれたかのよう。「眉一<sup>レ</sup>厯」ともに化粧法を云う。「螺首蛾  
 眉。朽笑倩兮。美目盼兮」(『毛詩』衛風・碩人。「厯色随<sup>レ</sup>星去。  
 髻影雜<sup>レ</sup>雲来」(陳・後主・七夕宴重詠<sup>ニ</sup>牛女、各為<sup>ニ</sup>五韻)。

21 【雲髮峨々、不<sup>レ</sup>加<sup>ニ</sup>芳沢。花容片々、無<sup>レ</sup>御<sup>ニ</sup>鉛粉】 「芳沢  
 無<sup>レ</sup>加、鉛華非<sup>レ</sup>御。雲髻峨々、脩眉聯<sup>レ</sup>娟。「華容婀娜、令<sup>ニ</sup>

我忘<sup>レ</sup>餐」(『文選』卷一九・曹植・洛神賦)。「花容」ハナノカ  
 ホ・カタチ「満目、香風裂<sup>レ</sup>鼻」(『遊仙窟』慶安版本訓)。☆  
 豊かな髪と美しい顔は馨しい脂や、白粉をつける必要もない  
 ほどだ。

22 【猶<sup>ニ</sup>驚鴻沐<sup>ニ</sup>於緑波、同<sup>ニ</sup>遊龍浴<sup>ニ</sup>於碧海】 「其形也、翻若<sup>ニ</sup>  
 驚鴻、婉若<sup>ニ</sup>遊龍」(『文選』卷一九・曹植・洛神賦)。「婉若<sup>ニ</sup>  
 遊龍、乘<sup>レ</sup>雲翔」(同・宋玉・神女賦)。☆不意に飛び立とう  
 とする白鳥や泳ぎ遊ぶ龍が海の波の中でゆあみするかのよう  
 だ。神女の美しい姿態の譬喩。

23 【輕体鶴立。將<sup>レ</sup>飛未<sup>レ</sup>翔】 「疎<sup>ニ</sup>輕軀<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>鶴立、若將<sup>レ</sup>飛而未<sup>レ</sup>翔」  
 (『文選』卷一九・曹植・洛神賦)。☆鶴が軽やかに今しも飛  
 び上がろうとするかのようだ。同じく神女の姿態の形容。

24 【娟娟】 「千看<sup>ニ</sup>万処娟娟、万看<sup>ニ</sup>万種娟娟」(『遊仙窟』)。  
 ☆「姿態のたおやかな様子」、「このうえなくあだめいた色っ  
 ぽさ」。

25 【繆統(綾)婉嬖(縷)腰支呢(之)百嬌而忽不申】 「婉兮

嬖兮、綵角州兮「婉嬖。少好貌」(『毛詩』齊風・甫田。「毛享  
 伝)。「千嬌眼子、天上失<sup>ニ</sup>其流星。一搦腰支、洛浦愧<sup>ニ</sup>其廻  
 雪」(『遊仙窟』)。

【改訂】①「昵」↓「昵」。②「繆統」(離れず付き添う)を  
 「婉嬖」の前に移動する(書写時の行の目移りか)。また、「繆  
 統」は「繆統」(まつわる)の誤写か。「婉嬖」は「婉嬖」(年  
 若く美しいさま)の誤りか。◆この部分の対句は「既而「繆統  
 婉嬖形体狎<sup>レ</sup>之、千嬌而卒難<sup>レ</sup>叙」。「繆統婉嬖腰支呢<sup>レ</sup>之、百嬌而  
 忽不<sup>レ</sup>申」とあるべきか。☆へびつたりと寄り添うたおやかな  
 姿態をもてあそぶと、その色っぽさは、とても口では言い表せ  
 ないし、纏い付くような若い腰を撫でると、そのあだっぼいこ  
 と、これまた筆舌に尽くしがたい。

26 【還疑<sup>ニ</sup>巫山之神女化<sup>ニ</sup>朝雲与<sup>ニ</sup>暮雨】 「玉曰、昔者先王嘗遊<sup>ニ</sup>  
 高唐、忽而昼寢、夢見<sup>ニ</sup>一婦人。曰、妾巫山之女也、為<sup>ニ</sup>高唐之  
 客、聞<sup>ニ</sup>君遊<sup>ニ</sup>高唐、願薦<sup>ニ</sup>枕席。王因幸<sup>レ</sup>之。去而辭曰、妾在<sup>ニ</sup>  
 巫山之陽、高丘之阻、且為<sup>ニ</sup>朝雲、暮為<sup>ニ</sup>行雨、朝朝暮暮、陽台  
 之下。旦朝視<sup>レ</sup>之如言。故為<sup>ニ</sup>立廟、号曰<sup>ニ</sup>朝雲」(『文選』卷  
 一九・宋玉・高唐賦)。へはたまた、かの巫山の神女が朝には雲  
 となり、夕べには雨と変じて現れたかのようだ。

27 【長生之玉殿】 「七月七日長生殿」(『長恨歌』)。☆「不老長  
 寿の宮殿」。

28 【金闕】 「西北荒中有<sup>ニ</sup>金闕、高百丈、金闕銀盤、円五十丈」  
 (『神異経』西北荒経)。「自威宣燕昭使<sup>ニ</sup>人入<sup>ニ</sup>海求<sup>ニ</sup>蓬萊・方  
 丈・瀛洲……其物禽獸尽<sup>ニ</sup>白、而黄金銀為<sup>ニ</sup>宮闕」(『史記』封  
 禪書)。「銀台金闕夕沈沈。独直相思在<sup>ニ</sup>翰林」(『白氏文集』卷  
 一四・八月十五日夜禁中独直对<sup>レ</sup>月憶<sup>ニ</sup>元九)。☆「黄金の城門

・宮殿」

- 29 【天仙—地仙】 「按『仙經』云、上士學『形昇』處、謂之天仙。中士遊名山、謂之地仙。下士先死後蛻、謂之尸解仙。」（『抱朴子』内篇・論仙）。☆本来、身分・階級の異なる天仙（蓬萊に住む）と地仙（名山に住む）は同居しえないが、天仙である亀媛は過去の宿縁に感じて夫婦の契（俗境之縁）を結ぼうという、地仙である浦嶋子を特別の方法で蓬萊宮へ誘おうというのである。
- 30 【澄江】 ☆ここでは地名（住の吉）を言うが、語としては「余霞散成綺。澄江静如練」（『文選』卷二七・謝朓・晚登三山「還望京邑」詩）などがある。
- 31 【須臾之間、向於蓬萊山。如夢如電】 「身体若飛、精靈似夢、須臾之間、忽至松柏巖、桃華洞」（『遊仙窟』）。☆現実界と異郷とを結ぶ回路が夢（幻覚）によってもたらされるとするモチーフの類型。「其夜王寝、果夢与神女遇」（宋玉・神女賦）、「於是精移神駭、忽焉思散」（曹植・洛神賦）。また、上掲「高唐賦」等参照。
- 32 【如夢如電、靈變難期。惚兮恍兮、幽暮易遷】 「廓如靈變。惚恍幽暮」（『文選』卷一一・木華・海賦）。☆夢見るがごとく、稲妻がきらめくごとく、たちまち玄妙な変化が起こり、うっとりするうちに辺りが薄暗くなった。
- 33 【陽侯】 【蕩雲】 「若乃三光既清、天地融朗、不汎陽侯、乘蹻絕往、飄安期於蓬萊、見喬山之帝像」（『文選』卷一一・木華・海賦）、「濯涉澗澗、蕩雲沃日」（同）。☆「波浪を起こして舟を襲う水神」、「雲を払い除く」意。
- 34 【萊舟】 「王子年拾遺錄曰、仙人乘桂舟、以弄月波。即蓬萊仙人也」（『李嶠百二十詠詩注』舟・八羽客乘霞至。仙人弄月來）の詩句の条。☆仙人の乗る舟。
- 35 【掣鯉洩洩。未知所志之遠近】 【汎汎悠悠】 「或掣鯉洩洩於裸人之國、或汎汎悠悠於黑齒之邦。或乃萍流而浮舫、或因熈風以自反。徒識觀怪之多駭、乃不悟所歷之遠近。」（『文選』卷一一・木華・海賦）。☆「風のまにまに漂う」、「流れのままに漂う」意。「改訂」 「汎々」↓「汎々」
- 36 【捉携】 「昔伊家臨淄。捉攜弄齊瑟」（『文選』卷三〇・謝靈運・擬魏太子鄴中集詩「八首・徐幹」）。☆手を携える意。
- 37 【斂顏容而動霧縠】 【以徐步於玉砌】 「於是播珮飾鳴玉鸞、整衣服、斂容顏」（『文選』卷一九・宋玉・神女賦）、「宜高殿以広意兮、翼放縱而綽寬。動霧縠以徐步兮、弘埤声之珊珊」（同）。☆顔かたちを整え、薄絹の装をなびかせて、寶石の敷かれた石畳をおもむろに歩む。
- 38 【碧巖】 「至於碧巖、無霧、綠水不風」（陶弘景・水仙賦）。
- 39 【冰紈】 「衣狐貉・襲冰紈」（漢書曰。齊地織作冰紈）（『文選』卷五四・劉孝標・弁命論「李善注」）。☆齊の國に産する白絹。
- 40 【覆覆】 「藹藹萋萋、覆覆芬芬」（『文選』卷一一・何晏・景福殿賦）。☆香りの盛んなさま。
- 41 【百和香】 「登思仙之台、張錦綺之帳、設象牙之牀、燒百和香、張雲錦之幃。然九光之灯、列玉門之璽。酌蒲葡萄之醴、宮監香果、為天宮之饌」（漢武帝内伝）。☆神仙を招き寄せるために焚く香葉。



- 42 【佩声鏘鏘】 「将翺将翔。佩玉鏘鏘」(『毛詩』鄭風・有女同車)。☆腰に着けたおびだまの揺れる音。歩行のさま。
- 43 【漁父・釣翁】 「嘯父」(『列仙伝』)。「泰山老父」(『神仙伝』)。「時時於市中売繒、亦謂之繒父」云(『列仙伝』)。「偃佺者槐山之採藥父」(同)。「祝鷄翁」(同)。「安期先生者瑯邪阜鄉人也、売藥於東海辺。時人皆言千歲翁」(同)。☆「父・一翁」は仙人の呼称の類型。
- 44 【鶉衣不重】 「子夏貧、衣若懸鶉」(『荀子』大略)。「鶉衣」(唐写本敦煌逸名類書・貧賤)。☆漁師の粗末な着物も天仙の着る羽服のように軽くなる。浦嶋子が仙人として充足することを言う。
- 45 【陵雲而弥新】 「相如既奏大人賦。天子大説、飄飄有陵雲氣、游天地之間、意」と(神仙の様を描いた「大人の賦」を読んだ帝の言葉)。「漢書」列伝卷二七下・司馬相如伝。☆仙人としての志がいよいよ高尚になること。
- 46 【心存強弱、得仙而自健】 ☆心は一層堅固となり仙骨を得ておのずから健やかである」というほどの意味か。前句「志成高尚、陵雲而弥新」と同意ととれば、「強弱」は「強」に意味がある。
- 47 【仙娥上月】 「譬若羿請不死之藥於西王母、姮娥竊以奔月、悵然有喪無以統之」(『淮南子』覽冥訓・不死之藥)。☆姮娥が不死薬を持って月の世界に昇ったかのよう。浦嶋子の仙遊のさまを言う。
- 48 【閑敞】 「厭紫極之閑敞、甘微行以遊盤」(『文選』卷一〇・潘岳・西征賦)。「体爽塏以閑敞、紛郁郁其難詳」(同卷四・張衡・南都賦)。☆ひろびろとしたさま。
- 49 【眩之目眩將墜】 「翻縣縣其若絶。眩將墜而復举」(『文選』卷四・張衡・南都賦)。☆これを見ると目が眩んで落ちそうになる。山の高いさま。
- 50 【巍巍隱天、俯視雲雨】 「鞠巍巍其隱天、俯而視乎雲霓」(『文選』卷四・張衡・南都賦)。☆その山は今天を覆うほど高大で、雲や雨を下に見下ろすほどだ。
- 51 【蕩蕩臨海】 「前唐中而後太液、覽蒼海之湯湯」(『文選』卷一・班固・西都賦)。「崇臨三海之崔嵬、飾赤鳥之譁嘩」(『文選』卷五・左思・吳都賦)。☆広々と海を臨む。
- 52 【冰夷出波而開曆、江妃臨岸而含嘯】 「海童之所巡遊、琴高之所靈矯、冰夷倚浪以傲睨、江妃含嘯而蹁跹、撫凌波而曳履、吸翠霞而天矯」(山海經曰。冰夷。人面而乘龍。郭璞曰。冰夷。馮夷也。列仙伝曰。江斐二女。出遊江浜。鄭交甫所挑者)。「文選」卷一二・郭璞・江賦・「李善注」。☆氷夷(河神)は波の中から顔を現してほほ笑み、江妃二女は岸に臨んで憂いを含む。「改訂」「紅妃」→「江妃」。
- 53 【金台玉樓】 「其一角正西名支圃堂。其一角東名崑崙宮、其一角有積金為天墉城。西方千里城上安金台五所玉樓十二所」(『雲笈七籤』卷二十六・崑崙)。「問、玉樓金闕、列真之境難窮。紫府黃庭、群仙之遊斯遠」(『本朝文粹』卷三・春澄善繩・神仙)。☆黄金や寶石づくりの台閣。崑崙宮の樓閣。
- 54 【隆崇而崔嵬】 「於其宮室、則有闌廡旧宅、隆崇崔嵬」(『文選』卷四・張衡・南都賦)。☆高大で聳え立つさま。
- 55 【紺殿綺窓】 「都護之堂、殿居綺窓」(『文選』卷六・左思・魏都賦)。☆紺色の宮殿・彫刻をきざんだ窓。
- 56 【煥爛】 「魚則江豚……鱗甲鏗鏘。煥爛錦斑」(『文選』卷

一二・郭璞・江賦。☆「光り輝く」意。

57 【金精玉英敷於丹墀之内、瑤珠珊瑚滿於玄圃之表】「金

精玉英瑣其表、瑤樹怪石碎其表」穆天子伝。河伯曰。示汝黄金膏。郭璞曰。金膏。其精汚也。孝經援神契曰。玉英。玉有英華色也。』(『文選』卷二二・木華・海賦・「李善注」)。

☆(『金精(黄金膏・仙莖)や玉英は丹塗りの庭(天帝の庭)に敷き詰められ、美玉や珊瑚は玄圃(崑崙山上の仙人の居所)に満ち溢れる。』)。

58 【玉樹結根：瓊林垂条：綠葉紫房、離離萋萋】「翠玉樹

之青葱兮「漢武帝故事曰、上起神屋、前庭植玉樹、珊瑚為枝、碧玉為葉」(『文選』卷七・楊雄・甘泉賦「李善注」)。

「煥若崑崙」山海經曰。崑崙之墟。有珠樹・文玉樹。』(『文選』卷二・張衡・西京賦・「李善注」)。「結根疎本、垂条嬋媛。布綠葉之萋萋、敷華葉之葳蕤」(『文選』卷四・張衡・南都賦)。☆(玉樹(珊瑚)を枝とし碧玉を葉とする樹木)は根を絡ませ、白玉の林は枝を伸ばし：緑の葉や紫の実がたわわに実り茂り合う。

59 【朱莖白帶、煌煌煥煥……綠葉紫房……感心動耳……廻腸

傷肝】「中阪遙望、玄木冬榮、煌煌煥煥、奪人目精、爛兮

若列星、曾不可殫形、榛林鬱盛、葩華覆蓋、双椅垂房、糾枝還會、徒靡澹淡、隨波聞鶴、東西施翼、猗昵豐沛、綠葉紫裏、丹莖白帶、纖條悲鳴、聲似竿籟、清濁相和、五變四會、感心動耳、廻腸傷氣」(『文選』卷二九・宋玉・高唐賦)。

「廻腸傷氣、頭倒失拋」同・宋玉・神女賦。『傷肝』「酸多傷脾、苦多傷肺、辛多傷肝、鹹多則傷心、甘多則傷腎」(『抱朴子』内篇・極言)、「悟彼下泉人、喟然傷心肝」(『文

選』卷二三・王粲・七哀詩二首)。☆(赤い茎・白いはなしへは光り輝き……見るもの聞くものにつけて心を揺すられ……はらわたをちぎられ深く心を傷める。』)。

60 【結実散香、綠葉紫房、離離萋萋】「布綠葉之萋萋、結

朱実之離離」(『文選』卷四・左思・蜀都賦)。☆(緑の葉は鬱蒼と茂り、たわわに実った果実はよき香りを発する。』)。

61 【艷彩繽紛】「晋太元中、武陵人捕魚為業……忽逢桃花、

夾岸數百步、中無雜樹、芳華鮮美、落英繽紛。漁人甚異之」(陶潛・桃花源記)。☆(美しい花が乱れ散るさま。共に異郷を尋ねた漁師の縁で、ここに桃源郷のイメージをも重ねるか。』)。

62 【飛香發越】「吐芳揚烈、郁郁非非、衆香發越」(郭璞曰。

「香氣射散也」(『文選』卷八・司馬相如・上林賦・「李善注」)。「萑若椒風、披香發越」(同卷一・班固・西都賦)。☆(香氣の盛んに発するさま。』)。

63 【其則清池之波心、芙蓉開唇而發榮】「爾乃撫輕舟兮浮

清池、乱北渚兮揭南涯」(『文選』卷四・張衡・南都賦)。「藻茆菱芡、芙蓉含華。從風發榮、斐披芬葩」(同)。☆(清池の中心には蓮が花を開く。』)。

64 【玄泉之涯頭、蘭菊含咲而不凋】「芙蓉覆水、秋蘭被涯

……陰池幽流、玄泉冽漉水黑色、故曰玄泉」(『文選』卷三・張衡・東京賦・「李善注」)。☆(玄泉(黒水を噴く泉)のほとりに蘭菊が常に花を咲かせている。』)。

65 【列仙之限】「若夫天封大狐、列仙之限」(『文選』卷四・

張衡・南都賦)。☆(仙人達の住処)の意。

66 【綺席】「膏鋏絶沈燎。綺席生浮埃」(鄒陽酒賦曰。綉綺

為席」(『文選』卷三一・江淹・雜體詩・休上人(別怨)「李

善注〕。☆「あや絹を張った敷物」。

67【撫心定気】「寐而夢之、寤不自識、罔今不寤、悵然失志。於是撫心定気、復見所夢」〔『文選』卷一九・宋玉・神女賦〕。☆「心を落ち着かせ、気持ちを整める」。

68【薰風吹宝帳。而羅帷添香】「昭昭素明月。暉光燭我牀……微風吹閨闥。羅帷自飄颺」〔『文選』卷二七・樂府・古辭・長歌行、『玉台新詠』卷二・魏明帝・樂府行〕。☆「心地よい薫風がベッドの美しい帳を吹きあげ、うすもののカーテンによい香りを添える」。

69【蘭灯】「文柏榻子、俱写豹頭、蘭草灯心、並燒魚腦」〔遊仙窟〕。「銀灯〔蘭灯〕」〔白氏六帖事類集・灯燭〕。「蘭膏明燭」〔以蘭香練膏〕〔『文選』卷三三・宋玉・招魂・「李善注」〕。「白氏六帖事類集」同にも。秋夜蘭灯九微。翠幌珠簾不独映〔駱賓王・帝京篇〕。☆蘭草の香料を合わせて練った灯心（脂）を用いた灯火。

70【芙蓉帳】「芙蓉帳暖度春宵、春宵苦短日高起」〔長恨歌〕。

71【素月】「白露暖空。素月流天」〔『文選』卷一三・謝莊・月賦〕。「昭昭素明月。暉光燭我牀」〔同卷二七・樂府・古辭・長歌行、『玉台新詠』卷二・魏明帝・樂府行〕。☆皎月。

72【鸞鏡】「昔闕竇王……獲一鸞鳥……三年不鳴、其夫人曰、嘗聞、鳥見其類而後鳴、何不懸鏡以照之、王從其言、鸞睹影悲鳴、哀響冲霄、一奮而絶」〔宋・范泰・鸞鳥詩序〕「芸文類聚・鸞」。

73【鸞衾】「文綵双鸞衾。裁為合歡被」〔『文選』卷二九・古詩十九首〕、「合歡・鸞衾」〔白氏六帖事類集〕衾〕。

74【玉体】「玉体紅顏難再遇」〔遊仙窟〕。☆女性の美しい姿態。

75【纖腰】「素手曾經捉、纖腰又被將」〔遊仙窟〕。☆細くて美しい腰。

76【魚比目】「鸞同心」。「魚比目。男女俱臥。女以一脚置男上、面相向嚼口嘲舌、男展兩脚、以手摠女上脚、進玉莖」、  
「鸞同心。令女仰臥展其足、男騎女伏肚上、以兩手抱女頸、女兩手抱男腰、以玉莖內於丹穴中」〔洞玄子〕。「医心方」房内所引〕。☆ともに、性技の型を言う。「改訂」〔鸞同心〕↓「鸞同心」

77【舒卷之形、偃伏之勢。普會於二儀之理、俱合於五行之数】「洞玄子曰、夫天生万物……其坐臥舒卷之形、偃伏開張之勢、側背前却之法、出入深淺之規、並會二儀之理、俱合五行之数、其導者、則得保壽命、其違者、則陷於危亡、既有利於凡人、豈無傳於万葉」〔洞玄子〕。☆「舒卷」は体を伸ばしたり屈したりすること。「偃伏」は横たわり腹ばい臥すこと。ともに男女の情交・房事を言う。「偃伏」は「個側房内之術、無不窮施」〔『本朝文粹』卷二二・鉄槌伝〕に同じ。なお、この平安中期のボルノグラフィ『鉄槌伝』には、『洞玄子』等『医心方』房内篇所収医書からの利用が著しい。『恒貞親王伝』所見の「偃息図一卷」は、「おそくつひの絵」〔古今著聞集〕所見〕と同じく、平安朝貴紳に流布していた秘画・春画の一種であるという（家永三郎『上代倭絵全史』六〇頁）。恐らくは、この『洞玄子』の解説する性技の図解・図絵の類の一書を指すのではあるまいか。とすれば、上記の「魚比目」「鸞同心」というのもそう特異なものではあるまい。☆「男女の会合は

陰陽五行の理に適った、宇宙の真理・人間の本来に基づくものである。の意。「改訂」「五行之教」↓「五行之教」。

78【無勞葦草、是可忘憂】「葦草、一名紫草、又呼為忘憂草。吳中書生為瘵愁花。稽中散養生論云、葦草忘憂」(述異記)。☆へ忘れ草を用いずとも憂いを忘れることができる。

79【霓裳羽衣、而道通於紫府之黃庭】「長洲一名青丘、在南海辰巳之地……有紫府宮。天真仙女遊於此地」(海内十洲記)。「五香芬紫府、千灯照赤城」(廣信・道士步虛詞)。「芸文類聚」卷七八・仙道、「紫府・黃庭・石髓・九芝・霓裳」(唐写本敦煌逸名類書・神仙)。「共乘龍昇天……及到天上一、先過紫府、金牀玉几、晃晃昱昱、真貴処也、仙人但以流霞一盃、与我飲之、輒不飢渴」(抱朴子)内篇・祛惑、「問、玉樓金闕、列其之境難窺。紫府黃庭、群仙之遊斯遠」(本朝文粹)卷三・春澄善繩・神仙)。◇「霓裳羽衣」は仙人の着物。「青雲衣兮白霓裳。學長矢兮射天狼」(楚辭)九歌・東君)。「述異伝曰、荀瓊字叔璋、事母孝、好属文及道術……俄頃已至、乃駕鶴之賓也。鶴止戸側、仙者就席、羽衣霓裳、資主欲对。已而辞去、跨鶴騰空、眇然煙滅」(芸文類聚)卷六三・樓所引、「古小説鈞沈」所引「述異記」へ☆霓裳羽衣(仙人の衣)を着て神仙境にのびのびと自適する。

80【喻霧散霞、而宛轉於絳青之碧落】「夫得<sub>レ</sub>仙者、或昇<sub>レ</sub>太清、或翔<sub>レ</sub>紫霄……夫道也者、逍遙虹霓、翱翔丹霄」(抱朴子)内篇・明本)。「絳青」↓「異苑曰、古者有<sub>レ</sub>夫妻、荒年菜食而死、俱化成<sub>レ</sub>青絳、俗呼<sub>レ</sub>美人虹」(芸文類聚)卷二・虹)。「青絳」は虹。「宛転」「始連軒以鳳踏、終宛轉

而龍躍」(文選)卷一四・鮑昭・舞鶴賦)。☆へ霧を吸い霞を食らい、虹の懸かる青空にゆったりと舞う。「改訂」「喻」↓「喻」

81【石鏡万尋、送<sub>レ</sub>万歳而不朽】「日林国有<sub>レ</sub>神藥数千種、其西面有<sub>レ</sub>石鏡、方數百里、光明瑩徹、可<sub>レ</sub>鑑<sub>レ</sub>五臟六腑、亦名<sub>レ</sub>仙人鏡、国中人若有<sub>レ</sub>疾、輒照<sub>レ</sub>其形、遂知<sub>レ</sub>病起<sub>レ</sub>何臟腑、即採<sub>レ</sub>神藥<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>之、無<sub>レ</sub>幾瘳、其国人寿三千歳、亦有<sub>レ</sub>長生者」(述異記)。☆へ病疾を治す巨大な仙人鏡はとこしえに不老長寿をもたらす。

82【優遊<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>香樓之上】「莫不<sub>レ</sub>優遊而自得、玉潤而金声」(文選)卷一・班固・東都賦)、「莫不<sub>レ</sub>優游以自得、故淡泊而無所<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>」(文選)卷一・何晏・景福殿賦)。「李善注」)。☆へ美しい楼閣の上にゆったりとくつろぐ。

83【徙<sub>レ</sub>倚於飛觀之中】「步樓遲以徙倚、白日忽其將<sub>レ</sub>匿」(文選)卷一・王粲・登樓賦)。「陽榭外望、高樓飛觀」(文選)卷一・王延壽・魯靈光殿賦)。☆へ高殿の中でのんびりとくつろぐ。

84【遊<sub>レ</sub>目於紫雲之外】「排<sub>レ</sub>飛閣而上出、若<sub>レ</sub>遊<sub>レ</sub>目於天表、似<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>依而洋洋」(文選)卷一・班固・西都賦)。☆へ遙かに紫雲の彼方を望む。

85【棲<sub>レ</sub>心於清虛之間】「善<sub>レ</sub>養生者、則不<sub>レ</sub>然矣。清虛靜泰、少<sub>レ</sub>私寡<sub>レ</sub>欲」(文選)卷五三・嵇康・養生論)、「便宜<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>洗眼<sub>レ</sub>并漱<sub>レ</sub>滷口腹、令<sub>レ</sub>内外清虛、口無<sub>レ</sub>余味、腹無<sub>レ</sub>余蒸、眼無<sub>レ</sub>余視、体無<sub>レ</sub>余塵」(雲笈七籤)卷五所引「太清玉微紫映觀上法」。☆へ精神を清浄虚無の状態に置く。

86【六甲靈飛之記】「今雖<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>其真形、觀<sub>レ</sub>其妙理、而無<sub>レ</sub>五帝

六甲左右靈飛之符、大陰六丁通真逐靈玉女之錄」(『漢武帝内伝』)、「靈飛六甲經」(『道教經典史論』・古道教目錄)。☆道教の仙書。

87【万畢鴻寶之書】「作内書二十二篇、又中篇八章、言神仙黃白之事、名為鴻寶、万畢三章論變化之道、凡十萬言」(『神仙伝』・劉安)。☆道教の仙書。

88【金丹石髓】「金丹」(『抱朴子』内篇・金丹)、「列仙伝曰、叩疎者周封吏也。能行氣練形、煮石髓而服用之、謂之石鍾乳。至數百年往來太室山中。有臥石枕床焉」(『北堂書鈔』卷一六〇・石)。「華曰、此仙館大夫。所飲者玉漿水也。所食者龍穴石髓也」(『仙境に迷い込んだ者が仙人から与えられて半年間飲食していたものの説明』(『搜神後記』卷一)、「石髓」(唐写本敦煌逸名類書・神仙)。「金精飛欲尽。石髓溜成堅」(唐・王績・遊仙四首)。☆ともに仙薬。

89【是分百種千名也】「酸甜滋味、百種千名」(『文選』卷四・張衡・南都賦)。「雖言服藥之方、略有千条焉」(『抱朴子』内篇・釈滞)。☆さまざまな種類があること。

90【玉酒瓊漿】「飲則玉醴金漿、食則翠芝朱英」(『抱朴子』内篇・対俗)。「以金投之、名為金漿、以玉投之、名為玉醴、服之皆長生」(同・金丹)。「穴則龍肝鳳髓、酒則玉醴瓊漿」(『遊仙窟』)。☆仙人の飲み物。仙薬。

91【九醞十旬】「酒則九醞甘醴、十旬兼清」(『文選』卷四・張衡・南都賦)。「又諸小餌丹方甚多、然作之有深淺、故力勢不同、雖有優劣、転不相及、猶一宿之酒不可以方九醞之醇耳」(『抱朴子』内篇・金丹)。☆ともに酒の名。

92【九光芝草、駐老之方】「七明九光芝、皆石也。生臨水之

高山石崖之間、状如盤椀、不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>徑尺以還、有<sub>レ</sub>莖帶<sub>レ</sub>連綴之、起三四寸。有<sub>レ</sub>七孔<sub>レ</sub>者、名<sub>レ</sub>七明、九孔<sub>レ</sub>者、名<sub>レ</sub>九光。光皆如<sub>レ</sub>星、百余步内、夜皆望<sub>レ</sub>見其光、其光自別……<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>一斤、則得<sub>レ</sub>千歲」(『抱朴子』内篇・仙薬)。☆一斤を服用すれば千歳の齡を得るといふ仙薬。

93【百節菖蒲、延<sub>レ</sub>齡之術】「仙人曰吾九疑神也、聞中獄石上菖蒲、一寸九節、食之可以長生、故來採之」(『神仙伝』・王興)。☆節の多い菖蒲。長生の仙薬。

94【九転靈丹】「一転之丹、服之三年得<sub>レ</sub>仙……九転之丹、服之三日得<sub>レ</sub>仙」(『抱朴子』内篇・金丹)。☆最上等の丹薬。三日間服用するだけで昇仙することができる。

95【尋<sub>レ</sub>不死之庭】「仍<sub>レ</sub>羽人於丹宮、尋<sub>レ</sub>不死之福庭」(『文選』卷一一・孫綽・遊天台山賦)。

96【子英之赤鯉、逐<sub>レ</sub>波而飛昇】「子英者舒鄉人也。善<sub>レ</sub>水捕魚得<sub>レ</sub>赤鯉、愛<sub>レ</sub>其色、好持婦住<sub>レ</sub>池中、數以<sub>レ</sub>米穀<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>之。一年、長丈余、遂生角、有<sub>レ</sub>翹翼。子英怪異拜<sub>レ</sub>謝之、魚言、我來迎<sub>レ</sub>汝、汝上<sub>レ</sub>背与<sub>レ</sub>汝俱昇<sub>レ</sub>天。即大雨、子英上<sub>レ</sub>其魚背、騰昇而去。歲歲來<sub>レ</sub>婦故舍、食飲見<sub>レ</sub>妻子、魚復來迎<sub>レ</sub>之。如此七十年、故吳中間戶皆作<sub>レ</sub>神魚、遂立<sub>レ</sub>子英祠云」(『列仙伝』子英)。☆赤鯉に乗って昇天する仙人。

97【緜氏之白鶴、凌<sub>レ</sub>雲而翔集】「至時、果乘<sub>レ</sub>白鶴<sub>レ</sub>駐<sub>レ</sub>緜氏山頭、望<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>到、舉<sub>レ</sub>手謝<sub>レ</sub>時人、數日而去」(『列仙伝』王子喬)。☆鶴に乗る仙人。

98【志高<sub>レ</sub>於淮南之雲中望<sub>レ</sub>鶏犬】「時人伝、八公安臨<sub>レ</sub>去時、余乘<sub>レ</sub>器置<sub>レ</sub>在中庭、鶏犬舐<sub>レ</sub>啄<sub>レ</sub>之、尽<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>昇<sub>レ</sub>天。故鶏鳴<sub>レ</sub>天上、犬吠<sub>レ</sub>雲中也」(『神仙伝』劉安)。☆劉安が仙薬を飲んで昇天し

たのち、皿に残った仙菜を嘗めた鶏犬もあとから昇天したとい  
う故事を引く。浦嶋子の仙人としての志しの高潔さを言う。

〔参考〕「鶏犬舐菜白昇天」(『世俗諺文』「神仙伝云一」)。

99 〔感深〕於鼎湖之空際隨鳥号。〔黄帝采首山銅、銄鼎於  
荆山下、鼎既成。有龍垂胡頰、下迎黄帝。黄帝上騎、群臣  
後宮從上者七十人、龍乃上去、余小臣不得上、乃悉持龍  
頰、龍頰披墮、墮黄帝之弓、百姓仰望黄帝既上天、乃抱其  
弓与胡頰号。故後世因名其処曰鼎湖、其弓曰鳥号。』(『史記』  
封禪書)。☆黄帝昇仙說話を引く。浦嶋子の仙人としての感動  
の深さを言う。

100 〔学者似牛毛、而得者罕於麟角之道也〕。〔或問曰、古之仙  
人者、皆由学以得之、将特禀其氣耶、抱朴子答曰、若夫  
視財色而心不戰、聞俗言而志不沮者、萬夫之中有一人  
為多矣、故為者如牛毛、獲者如麟角也。』(『抱朴子』内篇・  
極言)。「学如牛毛、成者如麟角、華山之下白骨如葬、何  
有可遂之理」(『顏氏家訓』・養生篇)。「学者如牛毛、成  
者如麟角」(『蔣子万機論』・太平御覽卷四九六・人部・  
諺下所引)。「遂使少麟角、輒比之繁風、俗多牛毛、妄  
喻之捕影」(『本朝文粹』卷三・都良香・神仙)。☆(仙道を  
学ぶ者は数知れず多いが、成就しうる者は殆どいない)。仙道  
の得がたいことを言う。

101 〔不可極楽〕。〔楽不可極〕(『礼記』／『群書治要』卷  
七引)。

102 〔閑思合離之道、稍覺榮衰之理〕。〔夫盛必有衰、合会  
有別離、壯年不久停、盛色病被侵。』(『涅槃經』卷二)。「合  
会有別離」あひ見ても峰に分かるる白雲のかかるこの世の厭

はしきかな」(『新古今集』・釈教歌・一九五八)。☆(静かに  
会者常離の道理を思い、次第に榮枯盛衰の理を悟る)。仙宮の  
欲楽を尽くす浦嶋子に仏教的な論しを与え、帰郷のモチーフへ  
とつなげる。

103 〔愛水之浮千河、毒焰之熨十山。〕。〔愛流成海、情塵為  
岳。〕(『瑞應經』、感傷世間、没愛欲之海。百法論曰、情塵之意  
合、故知生也。言、人皆沈於愛河、則妻子財帛也。』(『文選』  
卷五九・王巾・頭陀寺碑文・〔李善注〕)。☆(愛水は千河に溢  
れ出て、毒炎は十山を取り囲む)。「毒焰」は三毒(貪・瞋・  
癡)を燃えあがる炎に喩えていったもの。「氛氲三毒之烟」  
(『三教指帰』卷下)。(参考)「去夏哀情毒焰」(大江朝綱・為  
左大臣息女女御四十九日願文・『本朝文粹』卷十四)。愛欲の煩  
悩の妻まじさを言う。「以此功德、先靈恩父、過去慈親、掃  
塵界於梵風、破昏迷於慧日。涉波七水、闢攀十山。速証菩  
提、俱成正覺」(『耆家文章』卷一一・為刑部福主四十賀願  
文)。

104 〔愛別之變難、生死之運無窮也〕。〔八相為苦、所謂生  
苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五  
盛陰苦。』(『涅槃經』卷一一)。☆愛しい者との別離、生死の運  
命の耐え難さ、測り難さを言う。

105 〔枯槁〕。〔顔色憔悴、形容枯槁。〕(『楚辭』魚父。上掲)。☆  
「瘦せて衰える」意。

106 〔君子贈人以言、小人贈人以財〕。〔辭去而送之曰、吾聞  
富貴者送以財、仁人者送以言。吾不能富貴、竊仁人之号、  
送子以言。』(『史記』卷四七・孔子世家)。「君子贈人以  
言、庶人贈人以財」(『荀子』大略篇)。「孔子家語」にも。

「贈言」〔芸文類聚〕別・『初学記』離別・『白氏六帖事類集』餞送など。〔君子は送別に際して言葉を送り、小人は財物を贈る〕。別れに際して老子が孔子に贈った言葉。

107 【仙骨】「無<sub>レ</sub>神仙之骨、亦不可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>見此道也」〔抱朴子〕内篇・金丹。☆仙人としての骨相、素質。

108 【莫<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>声色、勿<sub>レ</sub>損<sub>レ</sub>真性】「凡人唯知<sub>レ</sub>美食好衣声色富貴而已、恣<sub>レ</sub>心尽<sub>レ</sub>欲奄忽終没之徒。慎無<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>神丹告<sub>レ</sub>之、令其笑<sub>レ</sub>道誘<sub>レ</sub>其」〔抱朴子〕内篇・金丹。「仲夏月也、君子齋戒、処必掩<sub>レ</sub>身、母<sub>レ</sub>躁、止<sub>レ</sub>声色」〔礼記〕月令。『白氏六帖事類集』養生所引。「娛<sub>レ</sub>声色」〔カタチヲタノシムデ〕〔遊仙窟〕慶安版本訓。「荒<sub>レ</sub>声色兮娛<sub>レ</sub>人」〔楚辭〕東君。☆へ女色に耽<sub>レ</sub>つて仙人の真性を損<sub>レ</sub>なつてはならない。〔改訂〕「青色<sub>レ</sub>声色」。

109 【五声八音損<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>之聲也、鮮藻艷彩傷<sub>レ</sub>命之色也。清醪芳醴亂<sub>レ</sub>性之毒也、紅花素質伐<sub>レ</sub>命之鏘也】「夫五声八音、清商流徵、損<sub>レ</sub>陰者、鮮華艷采、或麗炳爛、傷<sub>レ</sub>明者也、宴安逸豫、清醪芳醴、亂<sub>レ</sub>性者也、冶容媚姿、鉛華素質伐<sub>レ</sub>命者也」〔抱朴子〕内篇・暢玄。同様の文言は嵇康「養生論」にも見える。〔伐<sub>レ</sub>命之斧〕「皎齒蛾眉、命伐<sub>レ</sub>性之斧」〔文選〕卷三四・枚乗・七発。☆へ目・耳・酒・女色の楽しみは体を損<sub>レ</sub>ない命を縮めるものだ。

110 【亦以<sub>レ</sub>繡衣<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>鳥子】「上拜<sub>レ</sub>亮臣會稽太守。上謂<sub>レ</sub>亮臣曰、富貴不<sub>レ</sub>帰<sub>レ</sub>故郷、如<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>繡夜行」〔漢書〕卷六四・朱亮臣。☆へ錦を着て故郷に帰るの洒落を効かせたものか。後の長詩の部分に「自被<sub>レ</sub>繡衣<sub>レ</sub>還<sub>レ</sub>故郷」とある。『遊仙窟』の末尾の主人公が神女と別れを告げる折にも、錦を送る場面があ

る。〔下官辭謝訖。因遣<sub>レ</sub>左右取<sub>レ</sub>益州新樣錦一疋、直奉<sub>レ</sub>五嫂〕。なお、「美人贈<sub>レ</sub>我錦繡段」〔文選〕卷二九・張衡・四愁詩。ともある。

111 【送<sub>レ</sub>玉匣。裹以<sub>レ</sub>五綵之錦繡、緘以<sub>レ</sub>方端之金玉】「仙經曰、九輪丹・金液經・守一訣、皆在<sub>レ</sub>崑崙五城之内。藏以<sub>レ</sub>玉函、刻以<sub>レ</sub>金札、封以<sub>レ</sub>紫泥、印以<sub>レ</sub>中章之焉」〔抱朴子〕内篇・地真。「王即請<sub>レ</sub>此藥、貯以<sub>レ</sub>玉缶、緘以<sub>レ</sub>金繩」〔拾遺記〕卷二。「荆溪之珠、夜光之璧、薦<sub>レ</sub>之侯王、必藏<sub>レ</sub>之玉匣、緘<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>金滕」〔新論〕・因願。☆大切なものを封緘する類型辞。

112 【若欲<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>再逢之期、莫<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>玉匣之緘】☆仙人に貰った贈り物の中身を見てはならないとするタブー。類話Ⅱ「乃謂曰、自可<sub>レ</sub>去。乃以<sub>レ</sub>一腕囊<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>根等、語曰、慎勿<sub>レ</sub>開也。於乃婦。後出行、家人開<sub>レ</sub>視其囊。囊如<sub>レ</sub>蓮花、一重去、一重復、至<sub>レ</sub>五蓋、中有<sub>レ</sub>小青鳥、飛去。根還<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>此、帳然而已」〔仙境に迷い込んで仙女に会った衰相・根碩の二人の狐師は、帰りがけに囊を贈られたが、禁を破って家人が開けてしまい、それを知った根碩は茫然とする。のち彼は尸解昇仙したという〕〔搜神後記〕卷二。113 【分<sub>レ</sub>手辭去】「造<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>手而衛<sub>レ</sub>錦、感<sub>レ</sub>寂漠<sub>レ</sub>而傷<sub>レ</sub>神」〔文選〕卷一六・江淹・別賦。☆へ人に別れ、いとまを乞う。

114 【嗟<sub>レ</sub>會離離易、古人所<sub>レ</sub>歎也】「下官拭<sub>レ</sub>淚而言曰、所<sub>レ</sub>恨別易會難、去留乖隔」〔遊仙窟〕。「今日同<sub>レ</sub>堂。出門異<sub>レ</sub>郷。別易會難。各尽<sub>レ</sub>杯觴」〔曹植・當<sub>レ</sub>來日大難〕、「易<sub>レ</sub>離難會、古今所<sub>レ</sub>傷」〔本朝文粹〕卷八・小野美材・七夕代<sub>レ</sub>牛女<sub>レ</sub>惜<sub>レ</sub>曉更、応製。☆へああ会うことの難く別れることの易きは、古人の嘆くところ。

115 【携<sub>レ</sub>手徘徊、撫<sub>レ</sub>胸踟躕】「良時不<sub>レ</sub>再至。離別在<sub>レ</sub>須臾。屏<sub>レ</sub>

營衛路側。執手野鞠。』(『文選』卷二九・李陵・与蘇武三首)。「攜手上河梁。遊子暮何之。徘徊蹊路側。恨恨不得辭」(同)。☆手を取ってたちもとおり、胸を撫でて足踏みする。立ち別れがたいさま。匈奴の地における李陵と蘇武との別れの場面を重ねるか。なお、「徘徊不忍去。徙倚步踟躕」(『文選』卷二三・潘岳・悼亡詩三首)「最愛の妻の墓の辺りを去りがたくたちもとおり」もある。

116 【視「仙宮」之詭怪】「詭怪石異像。巖絕峰殊状」張衡七弁曰。蹊路詭怪」(『文選』卷二七・丘遲・且発漁浦潭「李善注」)。

☆不可思議・怪しげな仙宮を見る。

117 【颯颯翠嵐銷魂之媒介、森森素波驚骨之指南】「黯然銷魂者、唯別而已矣」(『文選』卷一六・江淹・別賦)、「使人意奪神駭、心折骨驚」(同)。☆へささと吹く山氣は別れの悲しみを募らせて魂も消えそうになり、果てしなく打ち寄せる波の音は、身を裂くような悲哀をかきたてる。

118 【足往心留、良会永絶】「抗羅袂以掩涕兮、淚流襟之浪浪、悼良会之永絶兮、哀一逝而異郷……於是背下陵之高、足往神留、遺情想像、願望懷愁」(『文選』卷一九・曹植・洛神賦)。☆へ足は行けども心は留とまる。夫婦の良縁はとわに断たれる。

119 【桑(草)田変改、而家園為「河浜」也、水陸推遷、而山岳成「江海」也】「麻姑自説云、接待以来、已見東海三為桑田。向到蓬萊、水又浅於往者、会時略半也。豈將復還為「陵陸」乎」(『神仙伝』麻姑)、「同・王遠」。「改訂」「草田→桑田」「桑田変改」(『白氏六帖事類集』「仙」)。(参考)「東海三為桑田」(『世俗諺文』「神仙伝云」)。(参考)「草田」のまま

も意味は通じるが。

120 【僅遇於洗衣老嫗】「須臾間、忽至松柏巖、桃華澗、香風触地、光彩遍天、見一女子向水側浣衣、余乃問曰、承聞此処有神仙之窟宅」(『遊仙窟』)。「金谷園記曰、漢武帝張騫使令極銀河之源、蹇到牽牛國孟津、時織女河邊洗紗、問曰、何故至此乎」(『詞林采葉集』)。(参考)☆異郷への入り口・境界で、洗濯する者に遇うモチーフ。

121 【於是島子知「仙洞」之衷、遊覽之間、時代遥謝、人事沿革】☆浦島説話の類話。「漢帝永平五年、剡泉劉晨阮肇、共入三天台山、度山出一大溪、溪边有二女子、姿質妙絶、遂留半年、懷土思求帰、既出、親旧零落、邑屋改異、無復相識、訊問得七世孫」(『芸文類聚』天台山所引「幽明録」)。(参考)「七世孫 本朝浦嶋子同事也」(『世俗諺文』「続齊諧記云」)。「其山又有「靈洞」……採「藥石」之人入中、如行十里……乃見衆女、霓裝冰顔、艶質与世人殊別。来邀採「藥」之人、飲以瓊漿金液、延入璇室、奏以簫管采桐、饒令還家、贈之丹醴之訣。雖懷慕恋、且思其子息、却還洞穴、還若「灯燭」導前、便絶饑渴而達旧郷。已見邑里入戸、各非故郷隣、唯尋得九代孫。問之云、遠祖入洞庭山採「藥」不還、今經三百年也。其人説於隣里、亦失所之」(『拾遺記』卷一〇・洞庭山)。

122 【胸臆】「循摺除而下降兮、氣交憤於胸臆」(望郷の思いで胸がいっぱいになる)。(『文選』卷一一・王粲・登樓賦)。

123 【絳宮】「故仙經曰、子欲長生、守一当明、思一至飢一与之糧、思一至渴一与之漿、一有姓字服色、男長九分、女長六分、或在臍下二寸四分下丹田中、或在心下絳宮金闕中丹田也」(『抱朴子』内篇・地真)。「絳宮心也」(梁丘子「黃



庭内経玉経註」卷上)。「次存中丹田、中有神人、亦披朱褐」の注に「中丹田心也亦名絳宮」(『雲笈七籤』卷五八・胎息口訣)。☆左の「金梁」・「玉液」とともに道教用語。

124 【鳴金梁、而飲玉液】 「勸者戒、節飲食、絶五穀、去

糠腥、鳴天鼓、飲玉漿、蕩華池、叩金梁、按而行之、当有異耳」(『漢武帝内伝』)。「醴泉。養生要集云、老子尹氏内解曰、唾者湊為醴泉、漿為玉漿、流為華池、散為精液、降為甘露、故口為華池、中有醴泉」(『三教指帰教光注』)。「引三景於明堂、飛元始以鍊形、采靈液於金梁、長甌白而留膏、擬澄泉於丹田、引沈珠於五城」(『抱朴子』内篇・至理)。「玉液」(玄泉口中之液也。一曰玉泉、一名醴泉、一名玉液)。(梁丘子『黄庭内経玉経註』)。「道人説丹経。方士鍊玉液」(傅玄求仙篇曰。玉液涌出華泉。楚詞曰。吮玉液兮止渴)。(『文選』卷三一・江淹・雜体詩・郭璞《遊仙》・「李善注」)。「☆へ鼻梁を叩いて液を唾飲む」というほどの意味(試訳)で、神仙のマジカルな所作・秘術の一つか。

125 【延頸鶴立】 「疎軀軀以鶴立、若將飛而未翔言如鶴

鳥之立望」(『文選』卷一九・曹植・洛神賦・「李善注」)。「☆鶴が頭を伸ばし、遠くを望むように立っている様子。

126 【鼈海之蓬嶺】 「列仙伝曰、巨鼈負蓬萊山、而抃蒼海之

中。列子曰、渤海之東、名曰歸墟、其中有五山、帝命禺強使巨鼈十五、拳首戴五山、時而不動」(『文選』卷一一・木華・海賦・「李善注」)。「☆蓬萊山を背負って蒼海に漂うという巨大な大亀の故事。

127 【隠淪】 「珍怪之所化産、傀奇之所窟宅、納隠淪之列真、

擬異人乎精魄」(『桓子新論』曰、天下神人五、一曰神仙、二曰

隠淪、三曰使鬼物、四曰先知、五曰鈔疑)。(『文選』卷一二・郭璞・江賦・「李善注」)。「☆神人の一。ここでは、隠れ住む意か。「陸沈」の項参照。

128 【雖思風発於詞林……雖言泉派於筆海】 「思風発於

胸臆、言泉流於唇齒」(『文選』卷一七・陸機・文賦)。「婦塘横筆海。平圃振詞条」(初唐・薛元超・奉和同太子監守違恋)、「春霞秋月、潤艶流於言泉。花色鳥声、鮮浮藻於詞露」(紀貫之・新撰和歌序・「新撰朗詠集」雜・文詞所引)。「筆海」(唐写本敦煌逸名類書・文筆)、「思風・言泉・筆海・詞林・詞条」(『文鳳鈔』卷六・詩)。「☆へ風のようにわき起る作文の感情を詞の林に書き著し、泉のごとく溢れ出る言葉を筆に写そうとするものの」。

129 【纖枝不展葉……沓浪未開花】 「或因枝以展葉、或沿

波而討源へ枝を頼って葉を茂らすようにすることもあれば、流水に沿って河源を求めるといったようなこともある(『文章の表現方法についての譬喩』)。「『文選』卷一七・陸機・文賦)。「☆文章の才の乏しいことを言う、謙遜の辞。「改訂」「査」↓「査」

◆「引用文獻の一覽」

「I」II 出典と考えられるもの。

- 『抱朴子』(内篇II 暢玄・論仙・対俗・金丹・至理・微旨・积滞)
- ・明本・仙薬・極言・雜志・登涉・地真・怯惑・外篇II 行品)。「文選」(班固・西都賦1・同東都賦1/張衡・西京賦2/張衡・東京賦3/張衡・南都賦4/左思・蜀都賦4/左思・吳都賦5/楊雄・甘泉賦7/司相馬如・上林賦8/王・登樓賦11/何晏・景福殿賦11/王延壽・魯靈光殿賦11/木華・海賦12/郭璞・江賦12/謝莊・月

賦13／鮑照・舞鶴賦14／江淹・別賦16／陸機・文賦17／宋玉・高唐賦19／曹植・洛神賦19／宋玉・神女賦19／丘遲・且竟漁浦潭27／梁府・長歌行27／李陵・与蘇武三首29／江淹・雜體詩31／屈原・漁父32／劉伶・酒德頌47／嵇康・養生論53。『遊仙窟』『神仙傳』。『列仙傳』。『述異記』。『拾遺記』。『漢武帝內傳』。『長恨歌』。『論語』(顏淵篇／子罕篇)。『禮記』(典礼上)。『毛詩』(鄭風／衛風)。『荀子』(大略)。『荆楚歲時記』(七月七日)。『史記』(孔子世家／屈原傳／封禪世)。『淮南子』(覽冥訓)。『楚辭』(遠遊／漁父)。『洞玄子』。

〔Ⅱ〕Ⅱ出典とは必ずしも断定できないが、参考文獻の例。

『文選』(古詩十九首29／江淹・雜體詩31／任昉・天監三年策秀才文36／司馬相如・封禪文48／王巾・頭陀寺碑文59)。『莊子』(逍遙遊／齊物論)。『漢書』(司馬相如傳／趙主傳)。『春秋左氏傳』。『毛詩』(齊風)。『白氏文集』。『玉台新詠』。『神異經』。『海內十洲記』。『養生要集』。『顏氏家訓』。『孔子家語』。『搜神後記』。

◇これらの漢籍のうち、藤原佐世撰『日本国見在書目錄』所見のものについて、その図書分類に従って配列しなおしてみると、『詩家』Ⅱ『毛詩』、『礼家』Ⅱ『礼記』、『春秋家』Ⅱ『春秋左氏傳』、『論語家』Ⅱ『論語』、『孔子家語』、『正史家』Ⅱ『史記』、『漢書』、『雜史家』Ⅱ『王子年拾遺記』、『旧事家』Ⅱ『西京雜記』、『雜伝家』Ⅱ『漢武帝內傳』、『神仙傳』、『搜神後記』、『荆楚歲時記』、『列仙傳』、『土地家』Ⅱ『神異經』、『海内十洲記』、『儒家』Ⅱ『荀子』、『道家』Ⅱ『莊子』、『抱朴子内篇』、『雜家』Ⅱ『淮南子』、『抱朴子外篇』、『顏氏家訓』、『楚辭家』Ⅱ『楚辭』、『別集家』Ⅱ『遊仙窟』、『白氏文集』、『文選』、『玉台新詠』。

以上の粗雑な一覧表からも窺えるように、『抱朴子』(及び神

仙・道教関連の書)の愛読が特筆に値することともに、『統伝』の引用漢籍(經典)のベースが『文選』であり、神女の美しさを表すには△隋△の賦、海の描写には△海・江△の賦、仙宮の叙述には△京都・宮殿△の賦、文章に関しては△文△の賦、別離の部分には△別△に關する詩賦など、そこに収められた数多の詩文の中から、テーマや表現素材に応じて△文選語△(特に賦の利用が顯著である)が引き出され、動員され、自在に綴られていることに改めて注意しておきたい。『文選』の暗誦が律令文人達にとっての必須事項であったことは令の規定(『令義解』・考課令所見)や官人の伝記・日記記録などに周知のところであるが、その具体的な實際を、△浦島説話△のごとき余技的な作品のなかに見いださうことは、本書の担い手(文章生上がりの男子知識官人層)とその知囊の形質(認識と創造の範疇)をあらためて確認させるものである。